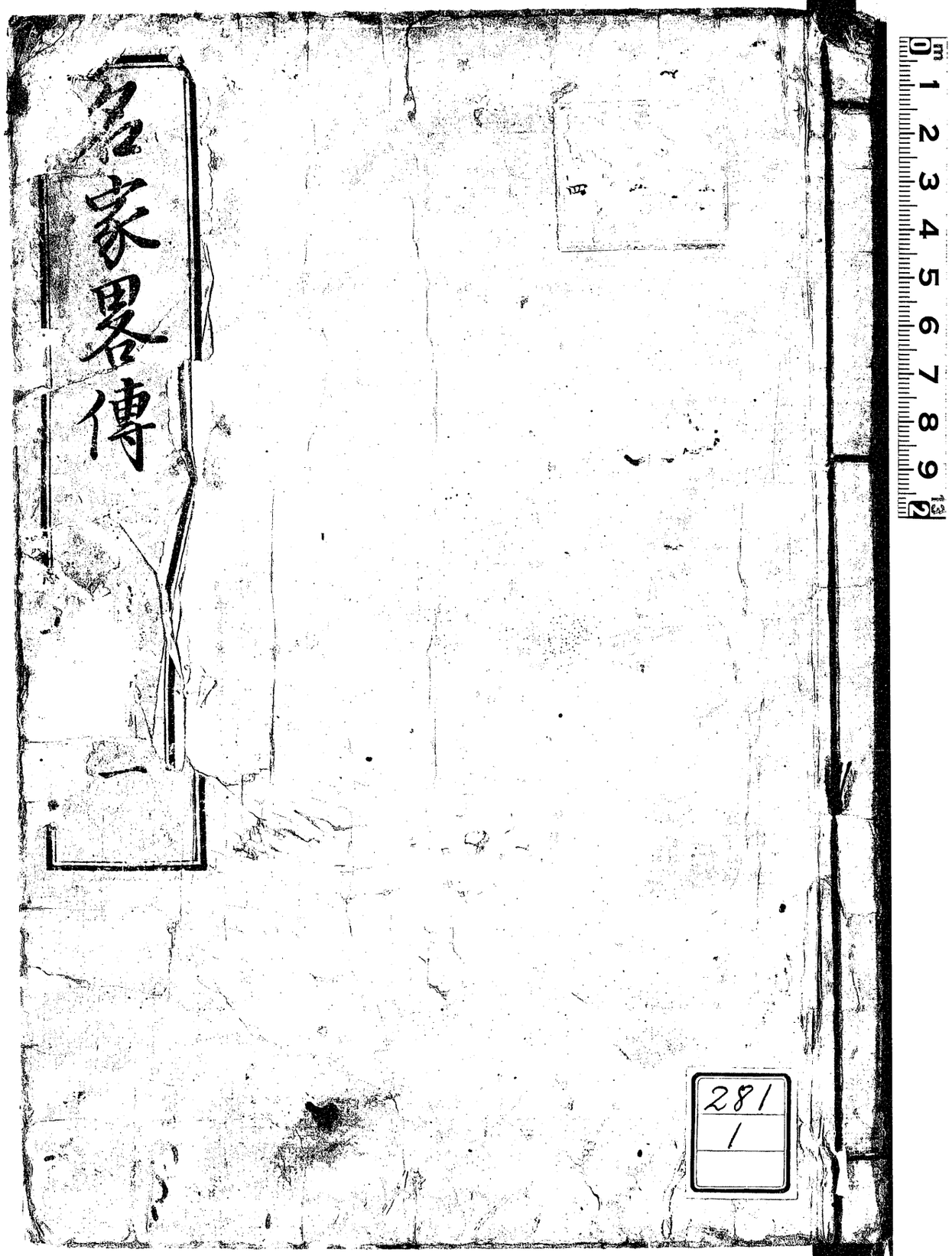

タイトル番号：0087

書名：名家略傳

4冊

山崎美成著
千賀春城訂

名家畢傳

發行書肆　江戸下谷御成道　英文藏

56170

本館　伊勢屋

讀書ハ博洽ヤ考據精確カヲ要スルヨリ歴世ノ興廢ヲ詳ニシテ古人ノ言行ヲ見テ今ニ施ヒスヿアリ。ヲ史學ヨリ志ス所ナリ。予幼ヨリ虚弱多病ナリ嬉戯優遊ヒトスラニ十餘歳ヲ過ヒ。年已ニ弱冠。自奮ヒ書ヲ讀マヒ学ヨリ志ス。終日几案ヨリ離レズ殆十年。國史傳紀ヲ渉獵シ。且讀ミ且購ヒ。蔵書萬

有餘巻。こゝより加ふるに書貨古物を以て
す。地を人らゝ獨学八固陋寡聞を免れ
次と。出て四方の名士角人と交りまゝ遠
遊を好こゝ経歴すること天下乃半に及
了かくて十年を経る里。齢ちやく四十
はをゝ老の初ふんとゝ。讀書交遊
ふ虚日おきと已に二十年。ゝ志を遂う。
こゝふ於く居をトゝ書帙擁ゝ新知を

をとめす舊好を修ゝて。老好の志を
養ちんを地りひゝふ。豈ちゝんや年
を追ゝ不熟。終に荒歳に到り人心競ゝ
たり。こゝ為ふ望こゝふ失ひゝれこゝ。後来
世路に疎ゝ花ハさゝふ東坡の三養を以
て住ゝ。山陰かゝる金杉村ふ屏居ゝ。
吟風弄月に日を消すること五年。燈
下窓前ゝりをめに隨筆次ゝこゝろや

帙をかやり。題して三養雑記といふ。おもに
古人を尚友するの意をもて。徒然れす
さまふ爐を圍み酒に對して。人の言行
を記して傳へきことのを集録せり。三冬を
やく盡くして歳除れ日。青雲堂を訪ふ。主人
頗義氣あり。一善行を聞て。称してやま
ず。常に直を挙るの志ありて。その行状を
編次して梓行せんと請ふ。応速あんことを

をねうふといへり。よりて腹稿のまゝ元日
の試筆よりはじめて。手ずから仮せて浄書するに
こゝふ。ちうに四十日にして書をやゝ成れり。
載るところの人物の雅俗に拘らず。傳紀
は詳畧をもあはせ考索せり。名家畧
傳といふ。青雲堂主人その書を讀みて云。
古人おのゝ志あり。先生書をよみて
を三十年。おもに得るところありやいふ

曾て文教温故軍防知新の二書よりその一隅をいう。五事業ことごとく屠龍の技に屬す。今や清世北一用人なく。酒に落ちたる胸中唯風月のみ。天保十二年春日。山崎美成誌る。

名家畧傳目錄

卷之一

瀧本坊服乘　長沼澹齋
佐枝政之進　宮川忍齋
長崎龜女　賣酒所
義僕元助　那河宗助
南川文伯　塚原卜傳
風外禪師　吉益東洞
和泉屋甚助　板坂卜齋

卷之二

薫葭堂　偏無為

佐々木玄龍
皆川湛園
遊女佐香保
綾部道弘
妙喜尼
服部天游
石田梅巖

巻之三

関思恭　思亮
水島卜也
桂松自謙
松山天姥
中洋道二
僧獨立
佐々木文山
冨士谷成章
遊女倉夫
島の勘十郎
辰巳屋抱之情
了月和尚

松雲禅師
原雲菴
近松彩重母
菱川吉之情
狂野山樂

巻之四

若冲居士
泊如和尚
僧兆溪
林道栄
僧古澗
志道軒　平賀源内
吉田空冒
浮世又之情
玉葛波
一口残翁
道且居士
石川丈山按書
肥後義士
田中丘隅

大島芙蓉　　増田鶴樓
河保壽　　吉田雨岡
排原香山　　心越禅師　東河
壷井雀翁　多田義俊　　奴の小万
殘夢和尚　　夜雨禅師
古林見宜

通計六十九人

名家畧傳巻之一

江戸　山崎美成編
同　千賀春城訂

瀧本坊昭乗

瀧本坊昭乗あるひは惺々翁と号し松巷堂といひ書を善くし書法は弘法大師に学び渴慕し畫圖は牧溪和尚の風采を仰希せしかゆゑに此國のうゑに上手どもいとく書まさりて龍管をとるごとゝ人に目を驚しよろこびめたり和尚をも詠じ殊に秀

逸多〳〵流葬ぬけやすく皐声天まで達するのあるひゐ〳〵雲
の上までも少えあげ〳〵うゐ〳〵山林斗藪の志しふく〳〵
て隙熱学座を好まゝよりて住あれ〳〵ハ情山も都
ホを〳〵精練薫修いとゝ〳〵森宝まつんかのゝあるべき地
ホあ〳〵ハ龍華の暁を明さんまハ志ゝ〳〵て吉野山まとゞ忘
ひたゝれ〳〵ある秋とゞゝうまゞろまれる夢ハ中ホ志ら
ぬ翁の来りて大菩薩乃ヤセとおを〳〵まハ〳〵〳〵
おと山の紅葉を見ねやんよりあふぐ高ねの白けの玉垣
時ハ長月ホあんありゝる夢うち覚てつゞゝこのことをおも
ゆゝ見れ中叡のゐあるを神もて〳〵〳〵そおを〳〵ホやい
とかゞ〳〵ゆ〳〵とゐひて次乃日つとめて祇園ゆ詣で感

感いとも〳〵〳〵と涙法ゝ〳〵是より鷲山のとハ歩ひ
ゞまり〳〵〳〵とゞまゝ坊ハ前ゆ羅漢樹ありゝれ実熟
して色つきぬれバ諸色あるまゝ帰めども服乗さゝふ此ゝ
もゝゝゝゝゝされバ服乗下山の時ハ小多どをさゝふ来ゝ
ず坊ゆゝゝれぬゝゞゝ〳〵多ハ声ゆき子ひえ多乃
さゞゞ〳〵群れゝ〳〵来りゝ乃ゝゝ乃ん議の拝謝鳥乃及情
ん子きゝよハあゝ〳〵角冠牙剣人情のまゝを墓ひ鱗甲毛
羽鱗氏ハ種を感じゝるゝあり〳〵全ゝゝゝゝふゝゝよいとま
ゞゝ〳〵ある時金剛経の講談せゝれゝゝゝ底無所住而
生其心の文よいゝゝ〳〵此文ハこの経ハ最上第一の文か
ら言服をつけゝ〳〵ハよ家ゞ書画も非善書是為善書と

辭せられしことあり晩年癰をやましくなやまれしころ身まかりなど
をすゝめ奉れバ翁ハ聞よりかく言ふ祖弘法大師の曰生是衆楽衆
苦所聚死亦不喜□憂乍逼とありかく聖者のおのれ
ごとき同じうだになされ秋暮の風を期する命なるの
ましく朝露の日を待まち惜むに似たりされバ薬を飲まん
じ幸年をこえて命期とおぼえられバなかなかいへど甫公
小堀宗甫の我をうれしたまふその心をやぶらじと思へバ菓子を
も飲み斗をも気絶もせよかし菓もたうべてそれよりもそ
のあらしにあらじとて薬をのみて眠るがごとく死す一
みまかられけり春秋五十六申の九歳にて寛永己卯九月十
八日申の時に殂ぬいとはかなききこえなんやしなひけるかなを

ハその様南山の麓にかきりて影なき甫公より佐川田昌俊
がかくまうけき暇たまはる文のおくに
我をおきてたぞろ人とかねてより思ひて契しとぞ命き
一蓮臺の安楽をおのがつかるやおぼしなん媛のこゝちするを
まのぞみを志して哀こし人よりも残るものぞ今は悲むべき
その紀法よりよりなかく廿日まで葬せざるされバ山上に
も山かもさらに声なく来つゞきも絶えてたれにもし
考妣の喪にあらむかぎり身をしまりけり
美成云昭乗の傍ちその友なりける佐川田昌俊れ
あらしたるかのわざにより こゝに載たり 楷書文
人物史なそとくと参考す

みはらしのあさち原
こゝろにまかせて
ねむるとしてわか
あはゆ義子
川のおとにさそはね
風に
こゝろすまして見れ

清流氏丘松居士題

長沼澹斎（ながぬまたんさい）

長沼澹斎名ハ宗敬通称を外記（げき）といへりその先ハ小山（をやま）結城（かうき）氏よりいでゝ長沼宗政（むねまさ）の苗裔（べうえい）たり世々武林（ぶりん）の翹楚（げうそ）として奥州長沼の城に居住し祖父（そふ）山城守広輝（ひろてる）正禄元亀（えいろくげんき）の間にあたりて地を争（あらそ）ひて戦死（せんし）し遂にその城を棄（す）てゝ子庶（しよ）一族のものことごとく伊達家（だてけ）に附属（ふぞく）しけりかくて広輝は六男外記広次（ひろつぐ）出羽（では）の刺史（さし）に仕へ慶長の末に至り難波の役（えき）に戦功（せんこう）ありて鉄炮頭と成れり致仕（ちし）の後ある侯（こう）の招（まねき）によりて紀州に移るとの事泉州堺にて老病となりて子澹斎（えんさい）時に年四歳なりさらにしるべきをかねばかりて信州松本の城主に肉縁（にくえん）あるものをもって澹斎ともなひその母